

適切な文字を求めて ——最も古い英語のアルファベットの起源について

パトリック・オニール

(ノースカロライナ大学チャペルヒル校)

(日本語要約：和田葉子)

本発表では7世紀の古英語のアルファベットの起源について考察する。まず、見本になった、あるいは、影響を与えた可能性があると思われる様々な国や地域のアルファベット、つまり、ルーン文字、フランク語、ブリトン語（ウェールズ語）、アイルランド語のアルファベットを概観する。そして、アイルランド語とそのアルファベットが古英語のアルファベットとその文字の形成に果たした役割について論じる。

ヨーロッパ大陸からブリテン島に渡ってきたアングロサクソン人は、7世紀の初めまでに、やがてイングランドと呼ばれるようになる地域に定住していた。イングランド南東部にあるカンタベリーへのローマからの布教と、北部のリンディスファーン島に本拠地をおくアイルランドからの布教により、7世紀の半ばには彼らはキリスト教社会を作りつつあった。

キリスト教はラテン語の聖書を読み、研究することに基礎を置く宗教であったが、キリスト教の布教はラテン語ではなく、その土地の言葉で口頭によって行われた。最初は通訳する者の数が足らなかったため、現地の聖職者を教育する必要がある。つまり、彼らにラテン語を教える必要があったわけである。このようにして、アングロサクソン時代のイングランドにおける読み書きが始まった。

7世紀後期までに、イングランドの聖職者たちはラテン語で読み書きできるようになっただけでなく、自国語、つまり古英語も書くようになっていた。興味深いことに、中世の多くの国においては、ラテン語を文字で記すようになって、必ずしも自国語を文字にして書いたとは限らなかった。特にラテン語に類似しているロマンス諸語を話していた地域では、自国語を文字にはしなかった。翻訳するまでもないほど言語がラテン語に似ていたからである。キリスト教化されたヨーロッパ大陸のゲルマン語圏でさえ、自国語を文字にすることはなかった。ブリテン島のケルト人たちは詩という文学を生み出していたが、口承文学であり、9世紀に至る

までそれを記録することはなかった。

英語の読み書きを行うきっかけとしては、例えば、亡くなった聖職者を讃える言葉を残したり、土地の売買などをする際に、名前や地名を記録する必要があったことなどが挙げられる。ラテン語の文章の単語に自国語の訳を付けることもあった。アングロサクソン人が英語に都合のよいアルファベットを考え出すに至った理由は、彼らがブリトン人、アイルランド人、フランク人といった文字を持っていた隣人たちに囲まれており、それに加えてローマのキリスト教文化も享受していたため、いくつもの種類のアルファベットの選択肢があったことが挙げられる。また、アングロサクソン人は大陸にいた頃、すでに、ルーン文字というアルファベットを使っていたので、彼らとともにルーン文字がブリテン島にもたらされた。

しかし、ルーン文字は英語のアルファベットに採用されなかった。その一番の理由は、本来ルーン文字が木や石といった硬い素材に刻むための文字だったので、羊皮紙に書くにはふさわしくなかったからだと考えられる。ルーン文字で書くと、画数が多くなるが、ラテン語のアルファベットは、一文字を記すのに、ペンを持つ手を上げずに楽に書くことができたのである。

とはいえ、ルーン文字は古英語に3つの貢献をした。すなわち、1つ目に、ソーン (thorn) と呼ばれる **þ** の文字、そして二つ目にウィン (wynn) と呼ばれる **ƿ** の2種類の文字が古英語に取り入れられたことである。3つ目の貢献は、アッシュ (æsc) という言葉である。これが、古英語の /æ/ の発音を表す a と e の組み合わせ文字 **æ** の文字の名前となった。

/w/ の音を表す uu という連字は、アングロサクソン人と同じゲルマン民族であったフランク人も使用していたことが知られている。フランク人はヨーロッパ大陸のちょうど英国海峡を挟んで、イギリスと向かい合う地域に暮らしていた。彼らは、修正したラテン語のアルファベットの文字を使って自国語を書いていた。特に、ブリテン島の南東にあるケント王国とフランク人の関係は深かった。フランク人の王女がケントの王と結婚した時、夫にローマのグレゴリオ法王から送られてくる宣教師を受け入れるよう説得したことが知られている。多くの研究者は、ケントにあった古英語の最古のテキストはフランク人によって筆写されたと考えている。その結果、古英語に、フランク語の /w/ を表す uu という綴りが導入された。この uu という形は後に、ルーン文字のウィンによってとって代わられることになる。

7世紀、ブリテン島には、上述の、ケントにきたフランク人に加えて、自国語をラテン語のアルファベットの文字で書いていた2つの民族がいた。彼らはいずれもケルト人であった。その内のブリトン人は、アングロサクソン人の侵入と征服によって、ブリテン島の西部、南西部、北部へと追いやられていた。ブリトン系ケルト人であるウェールズ人は、6世紀までには、すでに彼ら自身のアルファベットを持っていた。ブリテン島にもたらされたローマ文化の影響の

ために、彼らのアルファベットもラテン語のアルファベットを基礎にしたものであった。ウェールズ語のアルファベットはアイルランド語に影響を与えたが、古英語には大した影響を及ぼさなかった。その主な理由は、アングロサクソン人はウェールズ人の土地を侵略した民族であったため、両者の関係が良くなかったからである。

読み書きの中心となった、もう一つの場所はブリテン島の北西部にあるヘブリディーズ諸島にあった。この群島は何世紀にもわたって、アイルランドのダール・リアダという民族の植民地になっていた。その結果、彼らによってアイルランド語がこの地にもたらされた。6世紀後期、この諸島にあるアイオナ島は、そこに修道院を建てた有名なアイルランド人の高位聖職者コロンバの聖地となり、精神的、知的中心地となった。

アイルランドは5世紀にブリトン人の布教によりキリスト教化され、人々はラテン語の読み書きだけでなく、発音の仕方まで学んだ。そして、6世紀までにアイルランドから優れたラテン語の運用能力をもった学者が次々と生まれ、6世紀の後半までには、アイルランド語は文字にして記されていた。この頃、アイルランド語による説教散文や詩が生み出された。

7世紀初期、イングランド北部にあるノーサンブリアのアングロサクソン人の王族が流罪に処され、アイオナ島にやってきた。王の息子はこの島で洗礼を受け、後にノーサンブリア王になった時、アイオナ島の宣教団を招き、自分の王国をキリスト教に改宗させた。彼らは635年、ノーサンブリアに到着し、それから30年間、リンディスファーン島を拠点に布教活動を行った。彼らはノーサンブリアの聖職者にラテン語の読み書きができるよう訓練をした。そして、7世紀半ばから8世紀初期まで、多くのイングランドの学生がアイルランドに留学し高等教育を受けた。アイルランドの教師とイングランドの学生には、途切れることのない関係が続き、まもなくラテン語の読み書きが確立し、それがもとになって、後に、古英語を記述するために修正されたラテン語のアルファベットが生まれるに至った。

アルファベットはイングランドですぐに使用できる状態で導入されたわけでもなければ、ラテン語から直接そのままの形で入ったのでもなく、アイルランドで使われていたアルファベットが土台になって出来たものである。このアイルランドのアルファベットはラテン語を修正したものをもとにしており、ラテン語のアルファベットよりも数が少ない。当時のラテン語のアルファベットは全部で23文字あったのに対して、アイルランドのアルファベットは18個であった。重要なことは、4世紀中頃活躍した、ラテン語の文法家ドナタスが、実用的で機能的な5つの母音と12の子音からなる全部で17文字のラテン語のアルファベットを推奨していた事実である。

このドナタスの数の少ないラテン語アルファベットと古アイルランド語のアルファベットを

比較すると、たいへん類似していることがわかる。両者の違いといえば、アイルランド語のアルファベットには **h** の文字が一つ多いだけである。古英語のアルファベットとドナタスのラテン語のアルファベットを比べてみた場合、これも非常に類似しているので、古英語はドナタスのラテン語のアルファベットに由来するように見える。確かに、そのように推測する古英語の研究者もいる。

しかし、そうではないと思われる理由がいくつかある。まず、古英語は古アイルランド語のアルファベットのように **h** の文字を使っているが、ドナタスは使っていない。第2に、古英語は1つの音を表すのに3種の連字 **ch, th, uu** を使用している。**uu** は先に述べた通り、**/w/** の音を表し、フランク語の影響を受けている。そして、**ch** と **th** は、それぞれ、**/x/**、**/θ/** の音を表しており、確かに古アイルランド語に由来すると考えられる。ラテン語では **ch** は **/k/** と発音されるからである。3つめの理由として、古英語は非常に特殊な綴り字のシステムを採用している。すなわち、**b, d, g** がそれぞれ **/b/**、**/d/**、**/g/** に加えて、**/β/**、**/d̪/**、**/ɣ/** の音も表した。古アイルランド語のアルファベットにもこのように1つの文字が2つの音を表す用法があった。これはドナタスのアルファベットの考え方に反する。一つの文字は一つの音しか表さないというのがドナタスのラテン語のアルファベットであったからである。

もう1つ、古英語のアルファベットが古アイルランド語のアルファベットをモデルにしたと言える根拠がある。それは、同じ文字を2度繰り返す綴り方である。**/o:/** という長音は **oo** というように記した。これは突き詰めてゆけば、古典ラテン語に由来するのだが、アイルランドの写字生はこれを採用し、古典ラテン語よりも、ずっと多く活用していた。最も初期の古英語にも、この用法が見られるのである。

さらに書体に注目しても、英語のアルファベットが古アイルランドのアルファベットに由来していることを示す証拠が見つかる。アイルランドでは、書体は7世紀後半には十分に発達しており、6世紀後半にはすでに、アイリッシュ・ハーフ・アンシャル (Irish half-uncial) という書体が使われていた。7世紀前半、アイルランドの修道院では学問が栄え、希少な羊皮紙をできるだけ使わないようにするために、実用的な字体が必要となってきた。ミニュスキュール (minuscule) という字体が生まれたのはそういう経緯からだった。小さく書いて、羊皮紙を節約したのである。これら2種類の書体は、イングランドの学生がラテン語の読み書きを学習する時にアイルランド人の教師からおそわったもののだと思われる。特にミニュスキュールの書体はノーサンブリアだけではなく、イングランド全土で用いられた。

これらのアイルランドの字体は、どのようにして古英語のアルファベットに影響を与えたのだろうか。その答えは、アイルランド人の教師がイングランド人の学生にラテン語の読み書き

を教えた方法を考察するとよくわかる。学生は、最初、ラテン語のアルファベットの文字を視覚的に覚え、それぞれの文字の名前を学ぶ。そして、各文字が表す音を学習し、子音と母音を組み合わせて音節を作ることを知る。音節から単語へ、単語から短い語句、そして、文章を学ぶ。

学生は、読むと同時に書くことも学んだ。大きな、太字の、おそらくは上記のハーフ・アンシャルの書体によるお手本を真似ながら書いたことであろう。このようにして、書き写したり、聞き取ったりする練習をした。ちなみに、書くのに使用されたのは、手で持てる大きさの蠟で出来た板であったため、簡単に書いたり消したりできた。ラテン語の文章に使われたのは旧約聖書の詩篇で、これを読み、書けるようになる期間は、学生の能力にもよるが、6カ月から3年くらいであったと言われている。

西方のキリスト教圏ではこのような方法で読み書きが教えられた。しかしアイルランドでは教える方法が少し違っていた。アイルランド人にとって、ラテン語はまったくの外国語だったので、習得には様々な助けが必要だった。そのため、教育は密度の濃い個人的なものとなった。ヨーロッパ大陸の修道院では通常、学生は学識のある修道士のもとで、毎朝3時間、ラテン語を勉強したが、アイルランドでは、一人の決まった師匠 (master) のもとで学んだようである。学生はいつも師匠の近くにおいて、召使いのような役目もし、空いた時間に勉強も教えてもらう、という風であった。この教育方法はイングランドにもたらされた。

西暦650年頃には、多くのイングランド人が高等教育を受けるためにアイルランドに留学したことが知られている。彼らはアイルランドの修道院文化に触れ、ラテン語と古アイルランド語を操れるようになった。2カ国語使用の環境の中で教育が行われる間に、古アイルランド語のアルファベットが古英語のアルファベットに大きな影響を与えることは必至であったと考えられる。

(まとめ)

古英語のアルファベットはドナタスが提唱した、修正されたラテン語のアルファベットがもとになっているが、古英語に直接、影響を与え、そのアルファベットの基礎をもたらしたのは古アイルランド語のアルファベットであった。古アイルランド語のアルファベットは、古英語に **ch, th** の連字を与え、**b, d, g** の各文字がそれぞれ2種類の異なる音を表すという用法をもたらした。そして、母音を表す文字を2度繰り返して綴ることによって、長音を示す、という方法も古英語に導入した。さらに、このような最古の古英語のアルファベットに、7世紀後期、ルーン文字であるソーンとウィンが付け加えられる。そして、カンタベリー大司教であったテオドロスのギリシャ語学校からは、ギリシャ語イプシロン Υ に由来する **y** の文字が取り入れられ

た。このように最古の古英語のアルファベットの形成の物語は、古英語が7世紀に受けた様々な影響を反映している。つまり、アングロサクソン人が大陸からもたらした文字、そして、フランク語、古アイルランド語、さらにはギリシャ語からの影響を受けて出来た産物なのである。

(今回のシンポジウムでは、決められた短い時間の中で、講演の訳をしなければならなかったため、要約という形で通訳をした。その原稿をここに掲載していることを付しておく。)